

H16年度 土木学会推奨土木遺産・北海道支部推奨土木遺産選奨理由書（案）

名 称 十勝川 千代田頭首工

完 成 年 1935（昭和10）年3月

形 式 固定堰（コンクリート）

施設の緒元 堤長 169.6m；堤幅 25.2m；堰高 2.84m  
土砂吐門 8門（幅 各1.5m）  
導水門 2門（B=2.6m； H=1.2m）

推薦理由 本施設は、昭和初期に当時の土木技術の粋を集めて建設され、農業王国十勝の礎となった固定堰で、現存する同規模のものとしては道内最古の歴史を有する。

所 在 北海道中川郡池田町千代田

管 理 者 池田町土地改良区（承諾）

P R 方 策 池田町ワイン祭り（10月）などの地元イベントや道立十勝エコロジーパーク（年間来園者35万人）において説明パネルの展示。

その他特記事項 本施設は、十勝川新水路事業等、北海道の土木技術史に偉大な功績を残した斉藤静脩氏が工事監督者として関わっており、昭和初期の時代を代表する土木構造物の一つと言える。

また、雄大な流水の風情が広大な十勝平野と相まって大陸的な景観を形成し、十勝開拓のシンボルとして地域の人々に愛されるとともに、鮭の遡上が見学できる観光名所として全国からの観光客にも親しまれている。

連絡先・担当者 北海道開発局帯広開発建設部治水課 岡下  
0155-24-4121（内線）291

## 千代田堰堤 補足説明資料

### 「概要」

十勝川は、十勝岳を源に大小 200 余りの流れを集め、十勝発祥の地・大津で太平洋に注いでいる道東第一の大河であり、その昔に松浦武四郎は、道央の石狩川を「父川」、十勝川を「母川」と並び称している。

十勝川流域に広がる十勝地方は、明治後期に鉄道の開通により急速に発展したが、大正年間にかけては毎年のように洪水に見舞われ、住民は多大な被害を被ってきた。そのため、大正 12 年からは、帯広市周辺の市街堤防整備、統内地区捷水路工事など本格的な治水事業が進められた。

そのような時代背景の中で、現在の池田町千代田地域は、昭和の初めから十勝川より水路を掘り水稻栽培をしていた。しかし、たびたびの洪水に川の流れが変わり、また、河床及び水位の低下によって取水が困難となり、灌漑不能面積が昭和 5 年頃から激増したため、農業用取水施設の根本的な改良に迫られるとともに、統内新水路掘削による河床低下防止のための床固め工の役割を担った千代田頭首工（通称千代田堰堤）の工事計画を昭和 6 年北海道庁が策定し、昭和 7 年 9 月に工事着手、昭和 10 年 3 月に竣工した。

その後、千代田堰堤は度重なる洪水の洗礼を受けながらも大きく被災することなく、その当時の技術力の高さを偲ばせていたが、ついに昭和 50 年 8 月に発生した台風 6 号により被災した。しかしながら、堰堤本体に損傷はなく、堰堤の水叩き基礎部の土砂流失箇所コンクリートを充填するだけで使用できたため、副堰堤を増設し、さらに護床工でその下流を保護しほぼ現在の形ができあがっている。

現在では河床低下防止のための床止工、農業用取水施設といった役割のほかに、採卵用のサケ捕獲場としても重要な役割を果たしており、その捕獲風景や堰堤から流れ落ちる流水の壮大さとサケが水面をはねる様子は、人々に自然の雄大さや一時の潤いを与え、十勝の重要な観光資源ともなるなど、十勝開拓初期からの歴史を今に伝える郷土の誇りとなっている。

### 「技術的特徴」

この千代田堰堤は当時の土木技術の粋を集め、数百メートルに及ぶ十勝川の川幅を完全にせき止め、昭和初期としては北海道随一のコンクリートによる固定堰であるが、特筆すべき事はむしろ道内初の農業と治水との共同事業として非常に短い時間で成し遂げられたことにある。

千代田土工組合では昭和 5 年頃から灌漑不能面積が激増し取水施設を根本的に改良する必要に迫られ同年に北海道庁に請願し、翌年の昭和 6 年に北海道庁は工事計画を立て、調査を開始し、昭和 7 年に工事着手を行っている。

この背景には、千代田堰堤の下流で昭和 3 年から始まっていた十勝川の河川の改修計画が、幾多の事由によりキムントー沼を経て茂岩に至る新水路計画に変更された事が上げられる。

これにより新たに出来るのが統内捷水路であり、この影響により生じる上流の河床低下防止を目的とした部分を河川で、かんがい取水を目的とした部分を農業で行うこととして千代田堰堤工事が立ち上がっている。その当時の建設費は、治水費として 157,000 円、千

代田土功組合が186,000円をそれぞれ負担し、帯広治水事務所が施工主体となり実施している。

また、千代田堰堤には昭和初期の完成当初より魚道が設置されており、時代を先取りした河川兼用工作物でもある。

#### 「意匠的特徴」

昭和10年完成後、千代田堰堤は成度重なる洪水の洗礼を受けながらも大きく被災することなく、その当時の技術力の高さを偲ばせていたが、ついに昭和50年8月に発生した台風6号により、堤体直下流の河床が全面的に洗掘（最大水深H=7.0m）を受け、護床工としての堰堤直下流の鉄線蛇籠が流失し、堤体基礎部がパイピングを起こし被災するに至った。だが、堰堤本体に損傷はなく、堰堤の水叩き基礎部の土砂流失箇所にコンクリートを填充するだけで使用できたため、深掘れを起こした下流側に高さ3.64mの副堰堤を増設し、さらに護床工でその下流を保護し、ほぼ現在の形ができあがっている。

#### 「系譜的特徴」

昭和10年4月6日の十勝毎日新聞に「十勝川の堰止め三年越しの工事見事に完成す 救われた千代田水田」「一昨年九月一七日から着工、工事監督者斉藤治水所長の秘蔵弟子九大出身の芦田技師は着工以来数十回の大増水と闘い、徹夜すること百余日……去月二十日をもって十勝川の幅九十七間を横に完全に堰止めコンクリートの堰堤の上を融雪の大増水がシブキをたてて乗りこえ一大瀑布を現出し大偉観を呈している。」この斉藤治水所長とは、明治四十四年東京帝国大学を卒業し入庁した斉藤静脩（さいとう せいしゅう）氏であり、石狩川治水の父とも言われている岡崎文吉主任技師の助手を務めていた。昭和12年には当時の技術職でのトップである勅任技師に任ぜられている。

また、秘蔵弟子九大出身の芦田技師とは、芦田英太郎氏であり「工事資材を流出させては明日からの仕事に差し支える」として洪水により流出した足場に飛び乗り茂岩で救出されるなど、まさに命がけで千代田堰堤を造り上げた人である。

彼らにより造られた千代田堰堤は、幾多の洪水を経験しながらも本体部分は壊れることなく、補強や副堰堤を加えながら今日に至っている。

#### 「地域的愛着」

今でこそ、小舟を仕立てて網にかかったサケを引き上げる風景は見られなくなったものの、池田町のパンフレットやホームページには必ず紹介されるのがこの千代田堰堤である。

今でも9月から10月頃までは、「あきあじふる里シーズン」でにぎわい、池田町の秋の風物詩として人気を呼んでおり、池田町だけでなく十勝の人々からも愛されている。

また、流水が堰堤を流れ落ちる雄大さやサケが水面をはねる様子は、まだまだ人々の心を引きつけて離さないものがあり、池田町や十勝のシンボルでもあり、モール温泉で名高い十勝川温泉や昨年開園した道立十勝エコロジーパークに隣接しており、今でも十勝の大きな観光資源の一つともなっている。





